

片山洋子作 「SPRING HAS COME」

<前編>

(効果音) (空港。アナウンス、ガヤ)

佐々木かおり えーと、確か、1時40分到着だったよね、お兄ちゃん？

佐々木大介 ああ、そうだよ。あそこの到着飛行機の掲示板にあるだろ？ カイロ発の JAL は1便だけだからな。

かおり うん。それにしてもまだかな。もう2時すぎたのに。

大介 そう焦るな。空港ってとこはな、飛行機が到着してから、税関とかなんとかを通過してこなくちゃいけないんで、時間がかかるんだよ。かおり、それくらい知っとけよ。

かおり ふーん。お兄ちゃん、飛行機に乗ったことない割に知ってるじゃん。

大介 ああ、おれも叔父さんに聞いたんだ。

かおり なんだ。あたしと同じじゃんか。あー、それにしてもまだかなあ。早く会いたいな、正彦叔父さんに。

ナレーション 空港で、何やら“待ち人来らず”のこの兄妹、兄は佐々木大介、青春高校2年生。妹は同じく佐々木かおり、青春中学3年生。2人はエジプト帰りの叔父さんを迎えに来ているのです。

(効果音) (到着アナウンス オフ)

大介 あ、来た 来た。

かおり 叔父さ～ん、ここ ここ！

山本正彦 やあ、大介君、かおりちゃん。

かおり お帰りなさい、正彦叔父さん！

正彦 かおりちゃん、少し見ない間にきれいになったなあ。

大介 叔父さん、冗談キツイよ。

正彦 (笑い) そんなつもりないぞ。やあ、大介君、出迎えありがとうな。

かおり 叔父さん、荷物持ってあげようか？

大介 荷物じゃないだろ。ストレートに言えよ、“お土産”って。

かおり やだ、お兄ちゃんたら、もう！

正彦 (笑い) じゃ、2人に大きな荷物を持ってもらおうかな。そーら。

大介 うあ、ほんとに荷物だぜ、こりゃ。

ナレーション にぎやかに3人は大介たちの家へと向かいました。

(効果音) (タクシー。街の雑踏)

かおり ねえ、叔父さん。エジプトどうだった？

大介 今度も大学のほうの仕事？

正彦 ああ。大学の考古学の仕事でね。この間、早稲田の研究クラブが発見したところを見学してきたんだ。

大介 あ、共同墓地でしょ。なんでも紀元前 2500 年ぐらいの。

正彦 ふーん、よく知ってるじゃないか。

大介 うん。おれさ、割と好きなんだよな。古代エジプトとか、古王国とか、ファラオのピラミッドとか…。

かおり お兄ちゃんが興味あるのは、「ツタンカーメンの呪い」とか、「ピラミッドパワー」とかでしょ。

大介 うるせ！ 女なんかに、古代に生きる男のロマンが分かってたまるか。ね、叔父さん？

正彦 うん、そうだ そうだ。

かおり 正彦叔父さんまで～。もう！ でもさ、あたしが知ってるエジプトのイメージって、なんかこう暗いんだよね。ロマンとは程遠いな。

正彦 どんなところが？

かおり だってさ、死んだ人の内臓とか取り出して、ミイラにしちゃうんでしょ？ ギョエー、キモワだよ。

大介 これだよ。どうして女は上っ面だけで、秘められた裏を考えないのかね。つまり「どうしてそうするのか」ってことをさ。

かおり え、「どうしてそうするのか」って？ うーん、ミイラをなぜ作るのかってこと？ 分かるわよ、そんなこと。それはさあ… どうしてなの、叔父さん？

正彦 ン？ そうだな、簡単に言うと、エジプト人は、“人間は、死んでも魂は生き残り、死体をミイラにしておけば、魂は、いつかまた元の体に戻って、生き返るもの”と信じていたんだな。

かおり へえー、そうか。それで、ミイラにして体を残しておかなくちゃならなかったんだ。

大介 おれ、こんなことも聞いたよ。ほら、ナイル川ってあるでしょ。あの川をね、死んだ人の魂が神のところに行って裁きを受けて、“太陽の船”とかいうのに乗って、戻ってくるんだって。

正彦 ああ、わたしもそんな話、聞いたことがあるなあ。まあ、エジプト人にとっては、なくてはならないミイラ作りだったんだ。その大切なミイラを保管したのが、さっきかおりちゃんが言ってたピラミッド、そのミイラが取られないように、という護衛役が例のスフィンクスってわけだ。“体さえ残ってれば、死んでも生き返られる。永遠に生きられる”って考えたんだな。

かおり あー、あたし、ピピッと来ちゃった。

大介 なんだ、それ？

かおり (まくし立てるように一気に) 今、ひらめいたの。あのね、漫画なんだけど、手塚

治虫の「火の鳥」って話、知らない？ あれさ、あれも永遠の命を探す人間たちの話なんだよね。火の鳥を食べれば、永遠に生きられるっていうんで、皆が争って奪い合うの。最後には、やっぱり、火の鳥は不死鳥だから、だれにも捕まらなくて、人間は寿命で死んじゃうのよね。

- 大介 (あきれて) お前、そういう話は、よくまあ覚えてペラペラ舌が回るなあ。
- 正彦 (笑い) でも、かおりちゃんのインスピレーションは、つながってるじゃないか。ミイラを作るエジプト人にしても、火の鳥を追いかける人間にしても、求めているのは同じ“永遠の命”だからね。
- 大介 “永遠の命”ね…。古代の話としては、ロマンを感じるけどさ、今、現代じゃ、なんかなあ。ずっと生き続けるなんて、疲れちゃうぜ。
- かおり あら、お兄ちゃん。さっきと違うじゃん。冷めたこと言っちゃって。
- 大介 昔と今の時代の差だよ。今の世の中の苦しさとか、ドロドロした嫌らしさがずっと続くんだぜ。百歳どころじゃない、200、300 と年取ってみろよ。今でさえ、大人になんかなりたかねえのに。一流企業に入るために、ちっちゃいころから受験勉強で小突かれて、入れば入ったで、出世街道からはみ出さないように、おやじみたいにアクセク働いて、そんなシンドい人生に終わりが無いなんて、あーやだ。おれはやだね。
- かおり お兄ちゃんて、クラいんだね、案外。すごい悲観的。
- 大介 お前はまだガキなんだよ。
- (効果音) (ポカリと頭を小突く)
- かおり いて！ 凶星だからって、ぶつことないでしょ、もう！
- ナレーション そうこうするうちに、3人は家に着きました。
- かおり ただいまあ。母さん、ほら、お土産！
- 母 正彦さん、お帰りなさい。よかったわ、無事に着いて。
- 正彦 ただいま、姉さん。ただいま、お兄さん。
- 父 やあ、久しぶりだね、正彦君。どうだったね、エジプトは？
- (効果音) (談笑)
- 正彦 いやあ、エジプトの日差しはキツイですよ。日本の春はいいですね。“うららか”って言葉がピッタリだな。あ、そう言えば、大介君、先月、誕生日だったね。“春”で思い出したよ。
- 母 そうね。大介が生まれたのは、春分の日だったから、もう16歳よ。
- 大介 (小声で) だからバイクに乗れるんだ。
- 正彦 え？
- 父 やめないか、大介。その話はもう済んだはずだ。いつまでもグズグズ言ってるんじゃない。
- 母 あなた…。

正彦 どうしたんですか？

かおり お兄ちゃん、「16になったからバイクの免許取りたい」って。

父 「まだ未成年だから、いかん」と言ったんだ。自分の責任も取れんうちはな。

大介 (小声で)「自分のことぐらい、自分でやれる」って言ってるのに。

父 まだゴタゴタ言ってるのか。男らしくないやつだ。

(効果音) (大介、荒々しく出ていくドアの音)

かおり あ、お兄ちゃん。

ナレーション それから数日たったある晩――。

(効果音) (電話の鳴る音)

かおり はい、佐々木です。は、警察？ あ、はい、大介は兄ですけど。あ、あの、ちょっと、お待ちください。(オフに)母さん、母さん、大変。警察からだって。お兄ちゃんのこと。

母 (オンで)え?! あ、はい、代わりました。はい、大介の母ですが、大介が何か？ え？ 無免許運転ですか？ うちの子がそんなことを？ はい。はい、承知しました。すぐに参ります。申し訳ございません。お手数をおかけしまして。はい、では。

(効果音) (受話器を下ろす音)

かおり どうしたの、お兄ちゃん？ 無免許運転って、お兄ちゃん、警察に捕まっちゃったの？

母 母さん、今から駅前の交番に行ってくるから、家のこと頼んだわよ。あ、それから、父さんには黙っててちょうだいね。あとできちんとお話しするから。じゃ、頼んだわよ。

ナレーション それから数時間後、大介は母に連れられて帰ってきました。

父 初めての経験はどうだった？

大介 …。

父 お前は、法を犯したんだぞ。未成年だから、親が呼ばれて謝れば済むが、これも立派な犯罪だ。自分の責任が取れないってことの意味が分かったろう。

母 あなた。もう大介だって反省してるんですから。長い時間、事情聴取を受けて。

父 いいや、こいつには法を守るってことの大切さが、まだ分かっていない。お前のしたことで、どんな迷惑が人にかかるか、考えたことがあるか？ 親もいい加減絞られて、拳げ句はバカにされるんだ。いい面の皮だ。

大介 ほら見ろ。きれいごと言っただって、結局は自分の体面が大事なんじゃないか！

父 もういい、寝ろ。12時回ってるぞ。

ナレーション 大介は、こんな父親への反発から、いつそうバイクへの思いを熱くするのでした。そんなある日――。

男子 佐々木、そんなに乗りたいたいなら、今日貸してやるぜ。

大介 ほんとかよ。
男子 だけど、土手の内側だけにしろよ。マップに見つかり、おれの免許も危ないからな。

大介 ああ。迷惑はかけないよ。おれ、もう運転したくてウズウズしてるんだ。
男子 分かるぜ、その気持ち。じゃな。7 時におれんちおいでよ。あ、そうだ、メット持ってきて。あぶねえからな。

大介 分かった。じゃな。
大介(モノローグ) ヘルメットか。ないけど、ま、いいや。大丈夫さ。
ナレーション そして、その夜――。
大介(モノローグ) よし、さあ、行くぞ！
(効果音) (バイクをふかす音)
大介 あ、あ〜〜〜！
(効果音) (急ブレーキ。救急車のサイレン)

<後編>
(効果音) (急ブレーキ。救急車のサイレン)
大介 (うなる)
母 大介、気がついたのね。大介。
かおり お兄ちゃん。
大介 熱い…。熱いよ。目が…。目が熱い。母さん、おれ、一体…。
母 土手で事故を起こしたのよ。人をよけようとして、コンクリートの橋げたに真っ正面からぶつかっていったんですって？
大介 ああ、そうだったっけ。う、いて！
かおり 全くもう。お兄ちゃんたら。慣れないバイクで2回もムチャするんだから。だからこういうことになっちゃったのよ。
大介 うるせえなあ。女やガキには分からねえんだよ。
かおり すぐそれを言う。でも、減らず口たたけるくらいだから、大丈夫だね、母さん。
母 大丈夫なもんですか。当分入院だそうよ。「強く頭を打ってるから、十分検査します」ってお医者さんが言ってたわ。
かおり よかったじゃん、お兄ちゃん。
大介 何がだよ。
かおり けがしたのが、手や足じゃなくてさ。もともと悪い頭と顔でさ。
大介 このやろ！ いい加減にしろよ。
かおり べー！ いつものお返しだもんね。
大介(モノローグ) サンキュー、かおり。お前のネアカで救われるよ。…父さん、怒ってるだろうな。

かおり (クスッと笑って)お兄ちゃん、いい英語、教えてあげようか。

大介 なんだよ。学校のことは思い出させるなよな。

かおり あのね、スプリング・ハズ・カム！ 現在完了形だよ。

大介 なんだ、そりゃ？

かおり あたしのインスピレーション。今日、チューリップの花が咲いてたの。紋白チョウも飛んでたのよ。

大介 分かったよ。「春が来た」って言いたいんだろ？ めでたいやつだな、お前は。あれ、母さんの声がしないな。

かおり さすが。見えないと耳が鋭くなるんだね。今、父さんとこに行ったのよ。父さんがお医者さんと話してるから。

大介 父さん、来てたのか。

かおり 当たり前じゃん。事故って聞いて、父さん、会議抜け出してきたんだって。真つつかおになってた。なんだかんだ言っても、兄さんのこと、心配なんじゃない。

大介(モノローグ) そうか…。来てくれてたのか…。

ナレーション 大介は、心に突っかかっていたものが、スーッと下りるような気がしました。それから数日がたちました。

大介(モノローグ) あーあ、いつまで入院してはやくちやいけないうだろう。もう体の痛みも取れたのに。それにしても、せめてこの顔の包帯だけでも外してくれないかなあ。どら、ちょっと歩く練習でも。ヨイショ。ン？ どっちだ？ なんだ、分からないもんだな。“座頭市”だぞ、なんちゃって。

(効果音) (ゴツンとドアにぶつかる音)

あ、いて！ あはん、これはドアだな。ン？ 人の声が聞こえる。父さんと母さん？

母 でも、あなた。わたしにはそんなこと…。

父 しっかりしろ。お前がそんなことでどうするんだ。自然に振る舞うんだ、自然に。

母 でも、ああ、あの子の目が見えなくなるなんて、そんな…。

父 静かに！ 落ち着け。

大介(モノローグ) 目が見えなくなる？ 失明…？ おれが?!

母 あの子に、あの子になんて言えればいいんですか？ まだ16歳の大介に。

父 分かるように話そう。それしかない。

(効果音) (ドアの開く音)

父 あ、大介…。

大介 父さん、本当なの？ 目、見えなくなっちゃうの？

母 あ… あ、大介～～。(泣いて抱き締める)

父 さ、ベッドで話そう。な、静かにな。

ナレーション たった今聞いてきた医者言葉を父が説明するのを、大介はぼう然と聞いていました。事故の時、頭を強く打って、視神経を傷つけてしまったこと。そして、何かの小さな刺激で、それが切れるのも時間の問題だということ。

大介 …分かったよ。

母 だから、まだ光を見ちゃいけないの。できるだけ静かにしていたほうが、少しでもあなたの目を…。(泣きながら)分かってね、大介。

大介 ああ、そうするよ。あの… 独りにしてほしいな。

母 分かったわ。あなた、かおり、外に出ましょ。

(音楽) (ブリッジ)

ナレーション それから1時間後。かおりたちが病室に来てみると、大介の姿はありませんでした。ただベッドに、白い包帯が残されたまま――。

大介(モノローグ) あー、久しぶりの外の空気だ。あ、太陽がまぶしい。緑ってこんなにきれいだけ。まだ見える。見えるぞ。失明したら、なんにも見えなくなっちゃうんだ。今のうちに、この目にできるだけ焼き付けておかなきゃ。

あれ、子供たちが遊んでる。(近づき、ベンチに座る。)よいしょ。公園のベンチに座るなんて、何年ぶりかな。もう二度とないだろうな。あ、チョウチョだ。何が“スプリング・ハズ・カム”だ。はは、16歳の春でおしまい。短いのもいいさ。(笑う)壊れた目からも、涙は出るんだな。どうして、どうしてこんなことになっちゃったんだよ。おれにはまだ見たいものが、やりたいことがいっぱいあるんだ。クソ！

(効果音) (少女にぶつかる)

少女 あ、ごめんなさい。ぶつかっちゃって。

大介 え？ あ、いや、大丈夫だよ。(モノローグ)あ、この子の目は…。

少女 ちょっと合図を聞きそびれちゃったの。ローラースケートがぶつかって、痛くありませんでしたか？

大介 うん、なんでもないよ。

少女 ああ、よかった。じゃ、さよなら。

大介 さよなら。(モノローグ)あの子、両目とも見えないのに、ローラースケートなんかしてる？

少女 おじさーん、この辺で滑るわね。

正彦 ああ、気をつけてね。大介君、大丈夫か？

大介 あ、正彦叔父さん。

正彦 ああ、あの子を連れて今しがた病院に寄ったら、君がいないというもんだから、捜しに来たんだ。

大介 叔父さん、おれ…。

正彦 ああ、お父さんから聞いたよ。まあ掛けよう。(イスに座る、間)今の子、気がつ

いたろ？ 全盲なんだ。僕は彼女たちのサークルのボランティアをしてるんだよ。

大介 ボランティア？ ああ、そうか。叔父さん、キリスト教してるんだっけ。今の子、全盲なのに、ローラースケートなんてできるの？

正彦 そうだよ。彼女、生まれた時から目が見えなかったんだ。でも 10 歳の時、はっきりとイエス様を信じてから、すごく明るくなったんだよ。見えない代わり、感受性もとても豊かだしね。やっぱり神様は、不公平はなさないんだな。

大介 おれは、そうは思えない。途中から見えなくなる人間には、こんな不公平なことってないじゃないか。残酷だよ。それなら最初から見えないほうがまだよ。

正彦 いや、その逆ってこともあるぞ。見えてたものが見えなくなる代わりに、見えなかったものが見えるようになる。

大介 見えなかったもの？

正彦 ああ。ものを判断したり、感じたりするのは、人間の全身だよ。さっきの彼女のように、ひとつの失った機能を、他の部分が補っているよね。彼女は、肉眼では見るができない。その代わり、目に見えない、音とか、空気とか、声とか、そういうもので判断してるんだ。むしろこの世の中には、目に見えないもののほうが多いんじゃないか？

大介 そう言われてみると、電波とか、人間の心とか、愛とか…。

正彦 うん。それに、ほら、ここに咲いてる花の命とか。

大介(モノローグ) 人の命もかな。

正彦 そうだよ。人の命もだ。前に、空港からの帰り道で、永遠の命の話が出て、君は「永遠の命は要らない」って言ったね。その理由は、今の世のつらさとかが、ずっと続くななんてたまらないってことだった。そうなんだ。確かに人間は、生まれつきのままでは、どんなに長生きしたところでは悲しみは付いて回る。“罪”を持っているからね。永遠に生きるなんて、つらいに決まってるさ。でもね、キリスト教の神様の教える永遠の命は違うんだ。

大介 え、キリスト教でも、“永遠の命”を教えているの？ 確か“人間は罪人だ”とか、“キリストの十字架を信じれば救われる”とかいうんじゃないっけ？

正彦 うん、それもある。そして、両方の教えはつながってるんだ。つまり、自分が自己中心の罪人であることを認め、神のみ子のイエス様が、自分の罪の身代わりに死んで、三日目によみがえってくださったことを信じる時、僕たちは罪を赦されて、イエス様の永遠の命、“新しい命”をもらうんだ。

大介 新しい、命？

正彦 うん。来週はイースターだ。覚えてるだろ？ イエス様の復活をみんなでお祝いするんだが、これは、イエス様が死に打ち勝って、新しい命によみがえったということだ。死んでも死なない命だ。大介君、今、君はその目で、あの冬の間

死んだようになっていた自然が、新しく生き返っているのを見たろ？ 本当の命っていうのは、肉体だけの、時間の長さだけのものじゃない。たとえ自分が死んでしまったように思えても、今、この時に、君に希望を与え、本当に生きる力を燃え立たせてくれるものなんだよ。イエスさまはこう言ってるんだ。「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」って。

ナレーション

その夜、大介の容態は急変しました。やはり急に目を使ったのが悪かったです。頭痛がし、かすれゆく視力の中で、大介は、昼間見た、あの、二度と肉眼では見ることのできない少女の姿を思い返していました。すると、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。」というキリストの言葉が、あの少女の、まぶしいほどに明るい、命にあふれた姿と、不思議にひとつに重なり合うのでした。大介は、死んだような自分の心の中に、今、かすか希望がわきあがってくるのを感じ取っていました。

<完>